

2015 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—経済学部—

経済学部長 臼井 英之

今回のアンケート実施対象科目数は 297 科目、うち実施科目数は 228 であり、実施率は 76.8% であった。前期は 35 科目のみの実施であったから、母数をはるかに大きくなった。

同年度前期の授業評価アンケート結果と比較して、まず目につくのが[延べ回答者数/延べ履修者数]で算出される、いわゆる「授業出席率」である。経済学部は前期、約 55.4%と、他学部に比していささか悪い数字であったが、今回は 61.7%にまで上がっている。これはおそらく前期においては講義科目中心の結果で、ゼミなどの必修科目や専門の選択必修科目、あるいは語学関係科目などが含まれていなかったためであろう。今回はそれらの授業などが含まれた数字だから、こちらのほうが高くなって当然と思われる。ちなみに学部ごとの数値は不明だが、語学の「授業出席率」は 77.5%である（あまりよろしくない結果だと思う）。

評価の平均値は 4 以上が多いが、突出して高いとみなせる評価はない。国際センター科目などの、少人数でインテンシヴになされる授業の驚くべき高評価とはおおきな差がここにある。

全体の評価である＜設問 12＞「総合的にこの授業を評価できる」は 4.18 点で、前期とほとんど同じである（前期：4.12 点）。しかし、われわれ教員が、おそらくもっとも気になる、そして注力せねばならぬ項目内容、すなわち＜設問 11＞（この分野の関心と学力が得られた）は、前期に比して約 0.09 ポイント上がり、かつ相関係数も 0.78 とはるかに高くなった（前期相関係数は 0.59）。アンケート対象科目が前期よりはるかに増えてのこの結果であるから、この点は前向きに評価してよいであろう。

ただ、他学部の結果に比して、＜設問 6＞（この授業のレベルはあなたにとって適切であった）が 3.8 点台と低い。これは何を意味するのか？学生側の要因、教育する教員側の要因、それぞれがありそうである。学生のレベルのばらつき、学生の学力・能力を見据えた授業の展開、これらは受講人数が多くなればそれだけ、厄介な問題になる。

個々の習熟度や能力に対応したきめ細かい授業をするためには、＜設問 9＞（教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した）が、ひとつの判断基準になるであろうが、ゼミ並の人数の講義は数えるほどしかない経済学部の授業の実態からすればこの数字もやむをえないレベルなのかもしれない。

今後、これらの点をより改善する方向で授業のありかたを考えることになるろう。